家長制度

宮沢賢治

火皿(ひざら)は油煙をふりみだし、炉の向ふにはここの主人が、大黒柱を二きれみじかく切って投げたといふふうにどっしりがたりと膝(ひざ)をそろへて座ってゐる。

その息子らがさっき音なく外の闇(やみ)から帰ってきた。肩はばひろくけらを着て、汗ですっかり寒天みたいに黒びかりする四匹か五匹の巨(おほ)きな馬をがらんとくらい厩(うまや)のなかへ引いて入れ、なにかいろいろまじなひみたいなことをしたのち土間でこっそり飯をたべ、そのまゝころころ藁(わら)のなかだか草のなかだかうまやのちかくに寝てしまったのだ。

もし私が何かちがったことでも云(い)ったら、そのむす

こらのどの一人でも、すぐに私をかた手でおもてのくらやみに、連れ出すことはわけなささうだ。それがだまってねむってゐる。たぶんねむってゐるらしい。

火皿が黒い油煙を揚げるその下で、一人の女が何かしきりにこしらへてゐる。酒呑童子（しゅてんどうじ）に連れて来られて洗濯などをさせられてゐるそんなかたちではたらいてゐる。どうも私の食事の支度をしてゐるらしい。それならさっきもことわったのだ。

いきなりガタリと音がする。重い陶器の皿などがすべって床にあたったらしい。

主人がだまって、立ってそっちへあるいて行った。

三秒ばかりしんとする。

主人はもとの席へ帰ってどしりと座る。

どうも女はぶたれたらしい。

音もさせずに撲（なぐ）ったのだな。その証拠には土間がまるきり死人のやうに寂（しづ）かだし、主人のめだまは古びた黄金（きん）の銭のやうだし、わたしはまったく身も世もない。

底本：「宮沢賢治全集8」ちくま文庫、筑摩書房
１９８６（昭和61）年１月28日第１刷発行
１９９８（平成10）年４月１日第16刷
底本の親本：「新修宮沢賢治全集　第十四巻」筑摩書房
１９８０（昭和55）年５月
入力：こここす
校正：noriko saito
２００５年2月23日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、

校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。